
雨降る日にはぬくもりを

墮天使少年TOM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降る日にはぬくもりを

【Nコード】

N8670N

【作者名】

墮天使少年TOM

【あらすじ】

英西。

衝動的なものなので中身はあまり詰まってません・・・

(前書き)

えー・・・かつとして書きました。

自分でも設定よくわかんないorz

「なあ・・・アーサー」

掠れた、涙声が聞こえた。

雨があいつの顔をかすませる。

「ほんまに、信じてたんよ？なのに・・・なんで・・・なんで・・・
・！！」

俺は、申し訳なささと後悔が湧き出ているのを感じるだけで、うつむいたままだった。

もう、あいつの顔を直視できない。

「アントーニヨ・・・本当にごめん」

「ごめんで済むとでも思っとるのか！？俺の気持ち散々弄んどいて
！」

激しい、あいつの声。

泣いてるんだと思う。

手を伸ばす。

すぐに、あいつの感触が手に触れる。

そのまま抱きしめる。

「アーサー・・・なんで・・・こんなことになったん？始まりはい
つからやねん・・・」

掠れた声が耳元を這う。

俺はなんとも言えず、ただあいつの体を抱きしめた。

不意に、あいつの泣き声が轟いた。
子供みたいに、いつまでも泣いていた。

太陽が沈んだ。

雨雲の間から夕焼けの光が差し込む。

「始まりは・・・俺が太陽を求めた頃からだ」

アントーニヨはその言葉にびくつと体を震わせた。

俺は、耳元でささやいた。

「ごめんな、俺の太陽。笑って？雨はもう懲り懲りなんだ・・・」

アントーニヨは俺の方に顔をうずめ、小さく頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8670n/>

雨降る日にはぬくもりを

2010年10月20日20時10分発行